

令和6年度

病害虫発生予察情報 第4号

注意報第2号

北海道病害虫防除所 令和6年(2024年)5月17日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

秋まき小麦の赤さび病が多発の恐れ！ 発生リスクの高い地域では次葉展開期からの防除を！

近年、秋まき小麦主要品種の「きたほなみ」の他、「キタノカオリ」などの品種でも赤さび病の多発事例が認められています。本病は薬剤散布のタイミングが遅れると十分な防除効果が得られないので、防除適期を失しないようにすることが重要です。

赤さび病は高温多照によりまん延が助長されます。5月9日気象庁発表の1か月予報では、向こう1か月の日照時間は平年並で降水量は平年並か平年よりやや多いものの、気温は高いと予報されており、今後の天候推移によっては本病のまん延に好適な気象条件となる恐れがあります。

5月2半旬の定点調査において、訓子府町及び芽室町では本病の発生がほとんど認められていませんが、長沼町では病斑面積率が平年より高くなっています。近年多発傾向が続いている地域や既に発生が認められているなど発生リスクが高いと考えられる場合には次葉（止葉の1葉位下の葉）展開期から止葉期に高い効果が得られる薬剤を散布してください。

- | | |
|-------------|-------|
| 1. 発生地域 | 全道 |
| 2. 発生期 | 既発（早） |
| 3. 予想される発生量 | 多 |

4. 注意報発令の根拠

- 5月2半旬の予察ほにおける「きたほなみ」で全葉の病斑面積率は長沼町で平年より高くなっている。芽室町及び訓子府町では極僅かな発生にとどまっている（表1）。
- 予察ほではいずれの地点においても初発が早かった（表1）。前年の発生量が多かったことから、病原菌の越冬量は多いと推察される。
- 本病は高温多照がまん延を助長するとされており、5月9日発表の1か月予報では、向こう1ヶ月の気温は高い確率が70%と予報されている。

5. 防除対策

- 本病は散布タイミングが遅れると、十分な防除効果が得られないので、防除適期を失しないようにする。
- 発生リスクが高いほ場では、1回目の散布を次葉展開期から止葉期に効果が高く残効の長いインピルフルキサム水和剤Fあるいはフルキサピロキサド水和剤Fで行い、開花始に2回目の散布として赤かび病にも効果的なキャプタン・テブコナゾール水和剤あるいはプロチオコナゾール水和剤Fを用いることで効率的に防除できる。
- 1回目にフルキサピロキサド水和剤Fを利用する場合は、散布時に発病が認められる葉には効果が劣るため、散布時に次次葉（止葉の2葉位下の葉）に発病が認められる場合は使用を控える。

表1 無防除定点ほ場における赤さび病の初発期及び病斑面積率（％）

調査地点	長沼町		芽室町		訓子府町	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年
初発日	4月11日	4月18日	4月18日	5月14日	4月25日	5月18日
4月6半旬	0.05	0.03	0.00	0.00	0	0.00
5月2半旬	0.82	0.05	0.00	0.00	0	0.00
5月4半旬	—	0.11	—	0.01	—	0.01
5月6半旬	—	0.78	—	0.01	—	0.00

注1) 調査対象は全葉、本年は5月2半旬現在上位2葉の発病は認められていない。

注2) 表中の0は調査対象株に全く発生がないことを示し、0.00は0.01未満であることを示す。